枯尾華　終

911.3
オ
終

奥羽笠終

表　　居士

萬ゝの影向石や初音かな

和氣の借援にわかる草の芽　爲橋

朧月睫をむすぶに盗まれて　錦思

實りて起る氣違てなし　左立

鯲の囲の内にゆられゆられ　笠波

いつの矢の根の残る大門　白梵

冥加残おせてかく置り除の札　清波
拝のねらぎ村の合年貢　芝流
堕ち曲るまゝさそれなりの花の味　遊之
春壺方の梅ち八乱るゝ　李冠

表

暮しや素をさ見えるとなゝ　藤乃
般若の札の光る端り　槐凮
已抱の三梁参る唇噛く　向梵
みよみぞ蓋垣よあち踊らん　推角

無常迅速を枯草られ畠　不又
はりまれくもちよ百年　按之
あらしく飢ゑられハ綴り菜　居士
こほりか減も嵐燈臺　虜幸
投入れの梅もさそりよ利休風　桃園
柵りよの転ひ行しらん　東月

表

苗代や搗粉練り粉の水の味　楚分
飛む袋の中よ万像　居士

石出しの筆に急るの眺かく　初汲
禅しおとひさめしを穿鑿　扇招
揃る月なかめし此の猪牙船　三鳥
権の所しらふ揚を吹なり　木和
本咲の待く仁王も花の所と　白梵
茶の湯にされしさびしぬ書　滴志

表

浮ゐるの間の楔や俤きれ　英之
明すの定規をおろき風の香　桂子

冠の傾きを濤士に笑ハれく　桐雀
あるかしよ酔にまかふ方ヶ角　柿紫
継子にかさ雲かゝる白壁町に降り　吟枝
賣れぬ南蛮に月も照らねば　白梵
行し秋に若れちりさ世一人　嵜着
こゝらそまれとさ笹の葉の露　居士
石壇を順り遊川く供御の之　二木
螺の柄ひを喜ゆる海村　執筆

首尾

みえ氣や身にも痛める足の霜　市芹

績織る宿に遊ぶ川秋　礒舟

錦の月まつを夢ひて船を出して　鷺三

たの從られぬ耳をそ訪れ　白梵

棟木ぶきなしの樓の肥たり　何力

蜘くも飛ぶ火さへ菖乃青鷺　羽栗

武者道都の人子忘れて浅き河なり　不曲

川を隔て見る市地から　白浩

涼風を好める兒子かゝる夕日かげ　風里

待夜かり招く行くり八軒　居士

曇るもなき安徳帝の乳母かな　三林

涼解しの好る国さし汲し髪　人青

首尾

狼の書きてさくや曼珠沙花　奇水

我者暑くもを見せる冷飯　鷗波

月の御膳半に揚枝立ぬらん　心與

氣ましまへハ金宗の加る籠をさ　白梵

絅様をおのく堤ゟかくされ　竹里
中川屠らく詠る郭のゑ　梧鳳
出格子ゟ照らまて鏡の化粧かな　湖雪
深の盗人を守り世なん　千雀
何ら下もきんて影をくほし　椿又
知恵ある格別山王の猿　雨江
三月も降雨ゟ清める華のあと　推扣
寶劔らゟ氷る凍解し　櫻川

表

彩色ハ塔ゟ勝る秋の山　一亀
莞尓と出る日ハ空の煤掃　狸友
大内ゟり三石入の白米あり　居士
二十五弦ゟ柔なな調　誰也
照る月ゟり幕ゟり幕へ船隣　二風
忘れく武く寂ゟ也と　吟水
居合の法く働く筆の花　松径
言葉を作る鴻の上張　白梵

表

茶飡のわく時を経りけり　鶴扇

板ゐの雲り内の白妙　午鳥

隙もりれ漏れハ他出をうめく　雨曉

きんなくみ中ハおるさとおけ　柵之

いさ見せん比良や愛宕の其氣色　白梵

飛群ゐの雲り深こみ　竜水

日輪の空り花咲く水ま月　居士

夢の記禄のきさおつる　執筆

首尾

糸桜や天の油り地の何なり　射三

春り實の入る一女之男　箏玉

御號えけく雉子峰氏得よ　几鳥

のうくしこ取れ糧の菓苗　居士

傳ゑ川さ畫師の從投も掩月　扇雀

損料取く公ましの尻まち　倍之

横よりり盤のまさも荻子原　祖永

雨乞をせぬ圃よ出休　洞東

百足ほど何方へも隠れ袈裟は衣の上　岱青
名も知らぬ親子親の孝行　白梵
帰り花咲けと清らの願ひ状　池天
一ト化粧しく様の初雪　陽風

首尾

神送る風や赤子諷介に笛　雪賀
峯へ隠を引霜の桟　白梵
幕を張かけ雪隠の明るくに　梅梢
鯰の起し八村の恒例　獨松

猪より家鞍高く秋淋し　居士
皇子よりミ筋見て半月　故遊
御取捌も存ハ似たりに成さる　敬栴
祈り拝もふよくの雨絶　艸巴
長範が念力深く盗人等　湖峯
大偏く居る土地の風俗　喜壷
散る花ふきこて気ある居る　流石
穏しくの山もあこく　之楓

表

老の化粧しても[illegible]の盃　碇人
鬼さヽ知らぬ世で一角の夕月　吐雲
益雄ヶ子を拾ひけり撫子く　白梵
格さ分る贅の露霜　歌的
草木の独毒ある大日記　漱流
てりくとある山の万年　鱗長
岩戸へ八入れまするんの曙了　桑仲
我慢をあれし弘法の粥　羽帆

一時雨す薬咲催ろましく　居士
拾つのなき耳のあされ　湖青

表

息らけく也も山の九月立　女　糸櫻
鳥居の月立夢のうつくさ　同　耕流
あはれ一格の女の人まちく　居士
[illegible]　女　寞夕
[illegible]　同　蘭歌
翁日の窓を砂く[illegible]　同　琴夕

お盤の成る因人へ梅との花　白梵
笛うかうかる紅木の噂　執筆

表

大雪や射しる九万九千軒　素功
跳衣うしさくむ峯の鐘撞　白梵
離おしと嫁く八質種己よ来く　江舟
さうと人気と笹越の月　一峯
川音の岩了鎚も秋のくれ　谷水
秋寒うう老禅の胴骨　居士

咲花よ京うしゝ慥く古きしひ　楚江
貴ぬうしぬ篭のうくいそ　執筆

表

尾をりくく罠ろくゝうや也さく哉　水玉
風了性根の入えあ行種　居士
更る月明日の碁立の工夫しく　兎國
咽の乾きの痞ろるらん　巳千
若竹のてりまたる縄たなし　歌ト
丹塗り揚く淺雪月を干　花雀

公方より御忌の鋪る宮造り　讃木
ぬきさ合ふ中へ棒ら何か　白梵
ちる桜ちりきまくとの嵐よけ　支町
解てより雪も海のるらひ　執筆

表

寶鐸をめぐらひ跡ゝく落葉哉　文戎
〳〵の笛てる満月のかけ　樗竹
負ふさ鬼子喰れさおまよ行く　白梵
蓑てくつぬ伽藍くるゝ流れ　宇全

山腹て氏を流れを古鐘　何革
長押て注連を何を勧請　居士
行くれく降されく見ゆる爪の花　文絲
何いふる口へ蜂の巣乃蜜　執筆

表

かもゆきの罠よ鋪るる寒念仏　作文
宮川町と雪の縦糯　雲杖
朝何り丹のない鞘の穿鑿て　開卜
むく起の尾を引く細帯　地工

後代ハ戸口ニ草をちやきく　居士
鶺鴒ーきる村の名屋　樫木
帘の色かけ出きかのミ　梅五
湯立ての霧の晴るゝ七釜　甫太
岡ちか悪人こもて縄の脱　白梵
鋒もちりまる之光の声　執筆

表

煩悩て枝うさいてや鹿の角　林子
そもし好き岡菜月　紫鈴

水余吸の新酒桟橋ニ伝ミく　居士
岨うゝ岨へ高ひ窓詠　如梅
打客の雲茂笠を埋むらん　且卜
風薫りかゝる弦の窓　亀什
大唱うされる袂を纏ー　白梵
ワいと一声勝へ飛む　林鳳
雁の暖時う戴く啼むしき　柏千
まゝ脂の出る臼ニ草餅　吟長

表

海暮て嶽へ入り込桜かな　白梵

春季の祝具さゝの鳥　波心

俺月脊る神しの出かゝり　危原

笑りせ備の腮の急ぐる　東唄

何くしとの麦書葉に出し合　悠醉

越しハ付ても百二十川　同雲

花燈の消さを嫌しろ郭公　可中

狼の出る沙汰も甚草し　居士

表　尾州熱田

若き鳥の飛ひわたしや瓜畠　化光

涼み青し松の夕月　斗南

棟梁のかきひ新しく覗きけく　其九

見せるものゝの消てけりと　不尺

八徳もてしら油の硯川　馬山

帯巾はとかて雲のちゝ流く　花粮

貫之の母見るまゝ花の寂むける　枝来

難波のいつしよ伊勢の耳茜　拾翠

表　尾州佗屋

馬ハ繋かるゝ士はかり合歓の花　巨橙
太子を山ハ捨て嘩し蟬　吟山
朝の月礫に河原逢くなく　宇林
獨参湯ハまさる新酒　志宜
初あらし巴ゝ座の名くし　寄潮
驛路の枕賃くはしく済　鵝心
遅桜散る笈摺をよぬれけ　居士
霞の白ひハ其も近よる　白梵

表　尾州津嶋

千本の卒都婆流しやちる柳　兎足
帰用意と見ゆるしなる　居士
軒の秋撥かき琵琶をあそびけく　泉山
雲ハ油断ハせぬ月の影　里春
盗人の初んハ多思の渡こそり　白梵
汽ふりこさある船の笑止さ　亀仙
年号ヲ何ハぬ文治の安内裏　山榮
神も余所目ゟくこさるあちこ　鯉滝

行かハ見る山の花の滝　枝卜

我懐の雛の夕陽に啼　知足

表　同

旅籠屋の門火や済さ客もなし　白梵

盥の影ハ丸池の月　木危

松茸の瘤の出ぬきを探りけく　萬山

ゆそみし家りの公時ハ母　居士

因縁ハ法禍く杲報の縁ハ紀　之將

枝より枝へ猿の飛ひさく　文友

一力ニまかり巻頭の手かけ　菊東

酒ハ思案を霧ニ石摺　喜月

荒来りよ国傾ける藤の良　揃水

雲雀も登り隠く峰見　執筆

表　勢州四日市

満月や庭にあさ成る塔の影　周行

足何に石ハ乏しく雲啼　鳴之

人ならぬの末見えし枯く　銀皆

唐天竺も口の喰へぬ世　培之

万艘の舟こ〻り一夜二夜ゆり　千瓢
荒神の名をたゞ判者　候和
みな年の達者は續くむすは　里川
膳ひ京都にきく鶯　貞

表同

湖を呑むかゝるめゝの峯　扠高
扠了大床茶く納涼　仙夫
むれ雅が吾妻内裏の付合は　丁濤
きゞ分のこ〻女房ゝり　杜朴

水鳥の本ハ流れ流れ〻まりけり　竹皮
一ゞりくゞれさ開浮擅金　罍友
姨捨さ信濃も今宵月ゝ花　一川
麪類の妙見せゞくいと推　桂可

表同

鳶や秋迎の付属をうけてより　冨田　先庚
いはれ澤山ぬ国も寒風　仙夫
大仏の掐りて涼解ゆく〻　歌隣
我と気ゝてり判の墨色　無外

雨の月降涌維をさし百合　鷺汀
松ハ小袖ハ何のましはひ　柵坡
今まんの言葉のせも添ミとせ　周行
抱喰ひかりし獺く畾法師　鼠立

表　江州大津

枕灘くもり雁こうもほうきれ　文素
夕氣の雲を吸ふや兎草　可明
一筋の糸了千里の風もちく　紀北
ちれ夕河りぬ夕こさいつ妙ノ菜　可風

うかれうろ色も御所の車牛　心遊
残る暑さを弾くゆきちり　之弘
廣ちの誦了出よ川花ろく　松琵
初雁ちゆし上代の志賀　閑卜

表　同

世を妬きぬ色く素顔のちらちら　秀山
蚊の濁りすむ曙のこゑ　豊甫
月のよれ雨を猿のぬきぬ絹す　松琵
板屋の雨ハ穐らしうかし　芝庭

扨待の跡にみえて露まうさき合ひ　遊里
おちこくはやうし迷ひ子の札　露丹
金屏に移りの寄る花の山　自樂
風雅にし熟して地の春　梧吟

首尾　尾州刈安賀

北嵯峨の奥ハ浅みなし桃の花　八雷
しけろふりある白の深みの　向梵
日和待川初すゝ公の出初りに　可卜
元る合点ゝく虚言を信くと　遊浙

見臺のさゝきも仮名の文字の月　東虹
銀く毛彫の細ひ天目　木旦
とろり松交趾の王て情おれく　未覚
俄りふりのかゝる雨嵐　呂調
箱菓子とらせて黒んのまゝ拙　挑世
ちり八州にうれく大盃　万化
咲花の宝よりく神半お　居士
曇りともしく三光の声　兎耳

首尾　奥州瀬上

覚央僧都の舊跡葛の松原に
あそひて

松茸の裸やしらす松の何と　白梵

山と岡との間ニ照る月　嘉岑

大小の免許の軒ハ霧かれて　等舟

碁打かまれハ腰もうさせん　文松

光陰の世話を時斗のまかるらん　双流

寐耳ニ水の水鶏をく　百朋

讀賣りに流されもしてなからん　志水

てりちか脈ニ無くさき文　吐雲

あふれと玄番か運ハまさらは　其白

丸きの垣の隔かきえまて　有虎

神木に祭りおふせく我の照り　風志

ゆり掃の餅ニ鳥の囀り　松峯

表　同桑折　白梵

大木戸の何ちハ物干まて時雨を

箙を慕ふ鳥の梅か香　布川

指圖しく悪ゝの癖やわきらん　徂斎
まらし親の杖八人参　野東
田も畑もあるゝ耳ゝの月の露　可貞
鴫まり川罟を忘の引縄　得泉
ささありの節くく屋ぬ文もなり　可則
商ひすも大和阿蘭陀　一風
路く開く一致の花もしろ　湖柳
雛の膾了向ふ海や了　伴松

表　同懸田　白梵

山を巻く帯の餘りや坊の月　桃村
ゑる網絡了孫の無ふ蟷螂　仙舟
菜畑よ寐ふけふ働く苦労しく　流之
筆を採める下の七文字　村
誠を合点しかくゝ菜綴酒　梵
いつ川のまかまゝ墓の節月　之
ゑる名も接木の也のこゝもし　舟
猜ゝ成るをこかく来ゝ雨

表　同　保原

園のゆひさきもかよひぬ鰻鰯　白梵

下の瀧の緒をたぬり　可川

帯仕立る袖垂ハ赤き袂裏く　東舟

おもく官女のくゆらかなしらん　金驢

味淋酒ニ暮待うちを海さら　昂耕

足高蜂の巣ヲ囲を川　不流

巌穴へくりこむこの品ありけ　鷺花

よ跡ニ脱く草鞋のうく　二川

何ぬくよきひ焼飯も膳の前　塵人

楪の前し次迄雛のもれ　象舟

表　濃州前渡

名月ニ夏の裏見せよ深小袖　少年　馬誂

蘭のもうれを菓の葉くもう　几旭

后嶋く御簾の几のもるらん　楚竹

件の主人もうてとうり矢　亀跡

拍子木ニ太鼓も合て八川ひ　保三

さし汐待く出き鰤舩　居士

倹令のきまぬ死骸て鷲の巴　石桂
皇子の孫まてもおつる　千竹
咲花の幕に似合ぬちらふし　白梵
廣なりしも鄙の永き日　牛川
首尾　遠州見付　喜哉
采女なる人焼茶を奏しけり
照る海月て名山のうけ　菊後
白鶴の集る墻行きふけく　羽人
ゑめちり身は下役の肴板　一囀

鋳ゝるゝ咲令銀の残菊　芝蘭
井戸堀るうちにかくれ里　此推
一ぬりの茶て癒の跡もなし　野笛
空も晴ある路の日の昇殿　對牛
射手八肩巾廣き花なれや　作文
今三伏の胴ふくしなり　盛下
荒行にかゝれとも玄禄　柏友
二人の侶くじらり雄　錦山
働きのくしのときの日もありけり　挑仙

津波蹴之しかよ揖れ　大原邑 代翠
猿寐しくれ座る八花の太子様　風士
天番の薹ざいらよる棚　大原邑 其然

表　常州 若芝

彩代の八挺鉦や渦のしく　松吟
秋待こゝろしく早との内　閑無
このの穴月を座をおきこうらくよ　泉鯉
紫菀咲なる違判しの帳　梅仙
十分の世ゝし十分の賜の声　白扇

ちゝ打の廣ひしゝ巾し　竹友
年呂く往女狂ひ色何しく　葵州
冰の樊の始ける衣更着　遊竹
鍬の刄よかゝる御首（ミクシ）よ開く花　幸卜
雉の音の立川山麦の膳　執筆

表　江戸

梅ろ香よつきゝ明て宵や蘭奢侍　白梵
出しゝ見きく来あの客　尚梅

草臥の息はくま凪やさく　花北

蹴退屈しさ鞠の暮さく　石芝

引く入る日に立替れ三日の月　路遊

後陣の船を招くや汀　蘆外

声ハしく容ハ尺へも霧の中　素丁

園ろいつ引くく尾七々仇　莞吏

去迚ハ蚊ア込世捨兄のうち　下也

なちわさ座禅石の暖かさ　雅圭

白雲の下冥く涌く谷の花　有隣

枯し柳しうて出る鶉鷹　梅至

遠山を自慢の窓や暮待く　女 櫻高
ちらしく軍にむく弓ハあれ　坂中
口上のゐろりハちゆきさ秋の暮　少年 木詩
蓼の花咲十四との袖　女 梨旭
牛の脊の笛ハ繪らしき暮の月　在江戸 心圃
數千羽落ちて江南の一人　執筆

首尾　越州高田

川筋の動くもうりや雪の朝　如雲
枯く柵しても尺出きて翦鷹　梅至

草臥の息凉くゆよ風やらく　花北
蹴退屈しく鞠の音くさ　石芝
引く入る日よ立替れ三日の月　路遊
後陣の船を招くも川汐　蘆外
声ハしく容ハ尺へきて霧の中　素丁
圃ハはうりく花七ヶ所　莞吏
去迚ハ蚊ハ込を詠れ足のうら　丁也
なかもしく座禅石のゆふすさ　雅圭
白雲の下界ハ涌く谷の花　有隣

干くおちらきしのね衣　千舟

表　奥州瀬上

梵子の吟杖をとゞめんと草扉を
叩くまいれする久し　等舟
照る月を外へ八ちゞし冬の露
ぬきうしまれく秋乃情ひ　白梵
耳をみの鐶を鯖鈴ありおうせく　仝
叩く扨の音紙あろ市中　舟
若かゝし鉋紙をけて風涼し　仝
犂まハミれ此龍の信長　梵
枝杉の花おひをてゝ花井稽　仝
蹄の跡ゝを追ふてて涼みけ　舟

表　奥州保原

鈴さ村積ゟ切れけり堪ち所　可川
霞も周をまさ行しその流　旧梵
桑の波をゐ〳〵まか船ハ八のいく　仝
今かおりし盆の百疋　川

世わたりのむしの鳴る声おほよ　川
もち押し行く大蛇の跡　梵
名月の行やきこゆる温泉の煙　仝
さく掛かあるまめまゝ晶　川

表

天人もうけて三保の春日かな　梅枝子
風の横織る陽炎のあゆて　八方
八川の舟たま八里も花ばかり　賑亭子
白髪の杖は腰の住ひかな　白髭

よし前に大和詞のおもむく　菊塘
ちどりの海は碇ふかく行く　東明
名月の晴れを抱ひぬるけふり　白梵
西風の朱をうちふ田かな　執筆

表　尾州犬山城北

白滝は不動は見るそ糸さくら　馬嵐
晒の花は夏をまけ風　志市車 冠嶺
長閑さの百は指足を釈持かな　居士
御用の牛は油いらん　鬼云

朝の月今日あ国の中あり　白梵
轆轤くるる札を冷し　北臼
うミ桜の鐘了しりある道成寺　馬延
延も合点くのける一箱　巴州
郭公雪隆る穴すゞさり　龍卜
きあるふ青き仙術　其曲

表　同城東

終夜こゝあまりいろく男鹿が　斧川
妹か礎の上く窓乃燈　居士
香奠をこ好る据る磨月　花天
槌を条川さ小祠いのしき　律湖
悪くされ風吹時了熱かさし　楊大
腮了残こ の味噌の庭川あり　海舌
なけぬしの詩了ゆあむ誘風開き　花頂
小便瓶了おもく紙入れ　和起
花八散車喧嘩の勝負ゟけ　琴流
野鶏の上案をさもる笹の葉　向梵

表　同城西　露黒

寒月や風のあしみに染なから　白梵
行屋へらはき大山の曲男
吼かゝる床机に尻の痛むらん　韃花
髭の末から軍配か涌　呂旭
落ぬ迄後に合点のなその箱　湖千
世間をあふまゝの二ね　大車
拍手の木神を帰くんこゝろ　洞水
主宿ハ枕めとす鬼切　周和

花かゝく魂かゝむ鍬子の香　居士
積塔の日ハ沢るのされ　茶陸

表　同城南　居士

竹の子やせん地あかりの二ちら
夢想を觴く須とて帰　女　梨雪
以師迹の名ひり策情あ見せらん　吐雲
上ゝ座敷かゝきれぬ河りゝ笠　濤流
平滓くゝ盃かゝる凡の孫　女　紫艶
代ゝ疱瘡の神ーと祈んころ　白梵

枯かゝる枝かゝ不思議を聞もの　女　素風

天降ると云今日のまつり　執筆

表

ぬしに縁よ鐘のかゝりや山桜　無前

鳥もかへる會合の時　三木

勝さむしきる神はおそれなく　久木

伽羅の風吹滝の病人　一竹

半分けの饗笥に古箕も月見して　白梵

ぬしとる鉋かゝ蔓の用心　執筆

庵有て末なきハ首かゝく足なき類なれども半身の佛像猶霊現かゝり姑る兜かうしき跋かゝんちうハのしをり行脚の迷ひをはらけ又連中の覚ひぬものとせるまゝの才条を顕せ

一　松嶋の詠ハ冨の観音の路地ちかのそむを第一とせまた川嶋ちかく二里半

一　坪の石文と尋ぬ處かゝもて立石と尋ぬへ田夫もしへる教由

一　下野室の八嶋を見ハ惣社ハ川ことと尋ぬへ

通るこそゆかし

一 世の中にまんねぬるなる中に東武の
正風と名付て古く細く弱くしてある
事のみをおもひて流行の句を聞ては異風
なりと誹る此徒のみなひとしく甚晋子を
悪ミ其角ハ蕉門を破るの徒誹諧之敵なりと
云思るを浅るへき事のかきりなり 人
そもそも晋子ハ蕉門の嫡弟なれば作を
扶桑に鳴るよしや晋子に悪しき事も
なれ既に翁も門人に其角嵐雪なりと是
誹諧乳臭の輩おしなへて世に名ある
聖語之其の其角をそしる時ハ古翁の目きゝ
違ひを顕はすなりなり井蛙の鳴きを
止く強弱の大海に知れよし

一 出羽の鮎浮ハ五十人山より見るを最上とせ

一 出羽慈覚大師の舊跡山寺を拝ハ一夜
宿りて暁の鐘を聞へし 岩橋
ゆきて梵音の思ひなり

下

6504
36 3 14

京花屋町通西洞院東エ入町
日野屋清四郎板